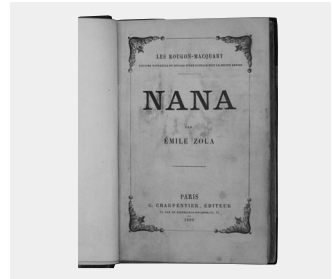


佛蘭西書巡覧 9

平山 弓月

ゾラは創造する。彼は事物の前に鏡をかざしているのではない。
彼は驚くべきものを創り上げている。〈創造し。詩化している〉のだ。

ゴッホ



絵巻物のごとく19世紀前半のパリを描き出したバルザックの『人間喜劇』については先回お話をしました。今回は19世紀後半のパリを中心とするフランス社会の諸問題を描き出した、エミール・ゾラ **Émile Zola (1840-1902)** が創作した20編の小説からなる叢書『ルーゴン=マッカーラー族』**Les Rougon-Macquart (1871-1893)** をご紹介しましょう。

「第二帝政下における一家族の博物学的かつ社会的歴史」との副題が示すように、この叢書は、大臣から下層労働者に至る、ある一族が生み出した多くの人物が、様々な環境で登場する小説群で構成されています。これらを一貫するのは、「遺伝」と「環境」という考えです。生来的な遺伝的資質が異なった環境の下で、どのように発現するのかをゾラは描き出そうと試みたのです。この試みが科学的に正しいかどうかというのは問題の残るところですが、この叢書には、現代にも通ずる諸問題を主題とする、『パリの胃袋』**Le Ventre de Paris (1873)**、『居酒屋』**L'Assommoir (1877)**、『愛の一ページ』**Une Page d'amour (1878)**、『ナナ』**Nana (1880)**、『オ・ボヌール・デ・ダム百貨店』**Au Bonheur des Dames (1883)**、『ジェルミナル』**Germinal (1885)**、『制作』**L'Œuvre (1886)**、『獣人』**La Bête Humaine (1890)** などなどの、魅力あふれる作品が含まれているのです。

ゾラが最初に成功を博した『居酒屋』では、下層の労働者の貧困と、それに起因するアルコール中毒を扱っています。働き者のジェルヴェーズ・マッカーラーは洗濯女（当時の社会では、最下層に近い女性の労働）をしながら、愛人と二人の子供を養っていました。しかし彼女は愛人に捨てられ、夢見ていたささやかな幸せは崩れ去ります。その後ブリキ職人のクーポーと結ばれ娘ナナをもうけます。しかしその幸せも、クーポーが仕事に屋根から落ち、働けなくなりアルコールにおぼれるようになって崩れてしまいます、ジェルヴェーズも働く気を失い、夫婦共々アルコール中毒に陥り、貧困の中死ぬという悲惨な結末を迎えるのです。

ジェルヴェーズの娘ナナを主人公とする同名の作品では、第二帝政下の特異な文化ともいえる、高級娼婦の華やかさと惨めさをゾラは描き出します。成長したナナは、自らの美貌と肉体をさらけ出すことによって、評判の女優になります。しかし彼女は、当時の女優の多くがそうであったように、一方では高級娼婦として社交界の男たちを数多く籠絡します。ミュッファ伯爵に囲われ、豪華な生活でパリ中の評判となりますが、放埒な生活が改まることなく急に姿を消してしまいます。再びパリに姿を現したナナの肉体は天然痘に蝕まれ、腐り果てて彼女は死を迎えます。おりしもパリの町は普仏戦争開戦の日で、「ベルリンへ！」と叫ぶ狂乱した群衆で溢れかえっていました。このようなナナの資質は「精神的肉体的退廃に転じるアルコール中毒の遺伝」であるとゾラは記しています。

さらに作家は、遺伝的資質の発現背景としての社会的環境を描いています。『オ・ボヌール・デ・ダム百貨店』では、19世紀後半に最初の成功を収める百貨店の実態が詳細に描かれますし、『ジェルミナル』では、炭鉱労働者の悲惨な労働を改善するべく労働争議を指揮するも敗北に帰するジェルヴェーズの息子を描きます。これらの問題は、現代社会にも多く見受けられ、私たちに身近なものとして私たちが対峙しなければならないものではないでしょうか。

ここにゾラを今読む意味があると思えます。

(この稿は清水正和先生の『ゾラと世紀末』(国書刊行会、1992)を参照しました。)

ひらやま ゆづき (教授・フランス語・フランス文化論)